

講義余聞

先生の趣味・特技

法学部(ドイツ語部会)

牧野ウーヴェ 教授

ハイキング

研究室でお話を伺おうと訪ねたら、ハイキングの写真をおさめたUSBスティックを持参された牧野ウーヴェ先生は、「写真をみながら話をしましょう」ということになり、1号館にある編集室に場所を移して、お話を聞くことになった。

50回超す高尾山登山

牧野先生が、これまでにハイキングに行った先の写真は、当ページに掲載したのでご覧いただくとして、先生は用意してきたハイキングマップをテーブルの上に開いて、話を始

めた。伺ったのは東京や東京周辺の日帰りで行けるコースが中心だったが、「高尾山は50回くらい登りました」というから、ハイキングを楽しむ姿勢は半端ではない。

「関東地域に住む日本人や外国人の友人と、月に2、3回休日に、東京周辺のハイキングコースを主に歩いている」という。

「高尾山から景信山を通過して、陣馬山まで行きます。6時間くらいかかりますね」。牧野先生は地図上を指でたどりながら説明する。「JR青梅線の」軍畑から青梅までのコー

スは10回以上やりました」。

そのほかにも、軍畑から高水三山(高水山、岩茸石山、惣岳山)

を回るコース、相模湖から石老山まで行くコースなど、先生はいくつものコースを熟知している。「予定を立てるときは時刻表をみながら交通機関を確認するだけ」というほど、どのコースも頭の中に整理されている。

地図で見ると、どのコースもけして楽ではなさそうに見える。かなり本格的だ。

泊まりがけで遠出もする。大学の生協のバックツアーを利用して北海道へも行く。「ここからの景観はずばらしい」と阿寒湖周辺をハイキングしたときの様子を写真をみながら楽しそうに語る。

引越しがきっかけ

牧野先生はドイツ出身で、中大に勤務して20年になる。ドイツにいたころはハイキングはしたことがなかった。ハイキングをはじめたのは、



阿寒富士をバックに

8年前に高尾(八王子市)に自宅を引越したのがきっかけになった。

「FOE」という国際環境のNGO団体に参加していたことや、埼玉県に住むアメリカ人教師と知り合ったこともあって、ハイキングをはじめた。

「ハイキングの楽しみは、友人と話すことです。友人と会って、お互いに近況などについて話すのがとて



知床にて牧野教授（右）

も楽しみ」と牧野先生。また、「季節によって変化する景色を見るのも楽しみのひとつ」で、京王線高尾山口から城山湖へ行き、高尾山へ向かう峠は、「景色が最高で、何回行っても楽しめる」という。先生のお奨めのコースのひとつだ。

ハプニングが起きることもある。野生の猿やへびに遭遇したり、一日に数本しかないバスに間に合わず、

日が沈んで暗くなってしまうたりしたこともある。よく知っているコースでも何があるかわからないので、「装備は大事。特に水と靴は大事」と先生は強調した。

一緒にハイキングに行くのは日本人が多いが、他にもドイツ、中国、

韓国など出身国はさまざま。英語が

母語の人は少なく、初対面ではお互いに何語がどのくらい話せるのかを

確認する。同じドイツ出

身でドイツが東西に分裂

していた頃を経験した人

とは、当時の話で盛り上

がるという。

友人がまたその友人を

連れてくることもあり、

ハイキング仲間のメーリ

ングリストには40人以上

が登録されている。ハイ

キングへの興味と、山道

を歩くのに適した靴さえ

あれば誰でも参加できる。

学生を誘うこともある

そうで、「もし興味があっ



百蔵山で。向こうに見えるのは富士山

ある。また、ハイキングで東北地方に行ったのをきっかけに、5年ほど前からけしにも興味があり、少しずつ集めている。

「大学は研究室と教室との間の移動だけ。頭のために、天気が良いと、外に出たいんです。人間は昔ジャングルに住んでいたのだから、自然の中に行つてリフレッシュしないと」。牧野先生にとつてハイキングは、頭も心も身体もリフレッシュするために、

今や欠かせないものになっている。

「次の日曜日にハイキングの予定

を入れると、火曜日ごろから待ち遠

しくなつて、週末の天気が気になつ

てしょうがない」というほどだ。「車

を新しく買ったので、八ヶ岳へ行つ

て一泊したいとも思っています」。

頭の中では、もうすでに次の計画が

浮かんでいる。

（学生記者 野崎みゆき 法学部3

年）